

Origin—土の命脈

札幌美術展 下沢敏也

北海道の陶芸界をリードしつつ、伝統にとらわれない造形や、陶土の可能性をひらくインスタレーション作品に挑戦しつづける作家、下沢敏也（1960- ）。「Re-birth」シリーズと名付けられた下沢の作品は、「風化から再生へ」と向かう生命の営みをテーマとしてきました。陶土で形作られるのは、時に朽ちゆく木々、あるいは再生する命を内に宿すかのような蓑虫、ぼろ布をまとう人間を思わせる生命の姿です。土には精妙な表情がつけられ、太古の昔から存在するかのような地層やひび割れが現れたり、さなきを思わせるふくよかさをまったり、その表現には確かな広がりが見られます。

18歳で陶芸の世界に本格的に足を踏み入れてから、やきものの地・信楽での研修、自らの陶房の設立を経て、1990年代以降は札幌、奈良、京都、東京など各地で個展を開催。すでにこの時から、その表現活動には二つの軸がありました——「うつわの仕事」と「前衛の仕事」。作家自身がこう呼ぶそれぞれの領域は、作家の制作人生において折々にその比重を交代させながら、しかし両者とも作家にとって不可欠なものでありつづけています。

本展では作陶の世界と、現代アートの世界とを縦横に行き来しながら作家が挑む、造形表現の「今」に迫ります。数メートルの大きさに及ぶ土の造形で構成される下沢のインスタレーション作品からは、生命の果てゆく姿と、その残り火の中から再生しようとする兆しを、見てとることができるでしょう。北海道の陶土を素材に独自の技法を探索する作家の世界を、どうぞご堪能ください。



《Re-birth 森へ》2014年 陶 作家蔵 撮影：前澤良彰
※本作の展示はありません

『下沢敏也作品集（改訂版）』中西出版、2020年

Re-birth…再生に向かう力。
風化は終わりではなく始まり。

しかし、確実に潜在する何かに向かっている。

行方はわかるが、未だ到達点は見えない…

痕跡を残し、一塊の土塊に命が吹き込まれる。

生まれ変わり、再び出会うその刹那のために…

多様な表情を魅せてくれるその大地と語り合う。

そして火に委ねる…その不確定なときを尽くす。

そして、素直に表現してみる。

躊躇いながらかたちにしていく。

土、水、そして火…

土と語り合う。

その根源的なものと向き合う。

Re-birth—土から…

下沢敏也

下沢敏也（1960-）SHIMOZAWA Toshiya

北海道札幌市生まれ、在住。1978年より父・下澤土泡のもと陶芸の道に歩み入り、1990年に陶工房shimozawaを設立。札幌をはじめ各地のギャラリーで個展を数多く開催するほか国内外のグループ展に参加。伝統的な陶表現のみならず、陶土を用いたインスタレーション作品を発表し、素材としての土の豊かさ、造形表現の可能性を追求する。

主な個展に「中庭インスタレーション 下沢敏也 Re-birth風化から森へⅡ」（札幌芸術の森美術館／札幌、2011年）、「下沢敏也展—Re-birth 風化から再生へ—」（LIXILギャラリー／東京、2017年）。主なグループ展に「北海道立体表現展'03」（北海道立近代美術館／札幌、2003年）、「Sprouting Garden-萌ゆる森-」（札幌芸術の森美術館／札幌、2014年）。1997年に北海道文化財団芸術家海外研修によりニューヨークにて研修。2009年札幌文化奨励賞、2011年北海道文化奨励賞、2023年札幌芸術賞を受賞。



撮影：山岸靖司



《Re-birth「痕跡」》2016年 陶土、顔料、酸化鉍物、アクリル、ボード
北海道立近代美術館蔵



《Rebirth》2021年 陶 作家蔵 撮影：山岸靖司



《Re-birth》（部分）2021年 陶 作家蔵 撮影：山岸靖司



《Re-birth[起源]》2016年 陶 札幌芸術の森美術館蔵 撮影：前澤良彰



《Re-birth》（部分）2020年 陶 作家蔵 撮影：山岸靖司



《Re-birth》2023年 陶 作家蔵